▼おこよ藤三郎（七巻）

帝キネ芦屋時代映畫

脚色者　矢内政治氏
監督者　江後岳翠氏
撮影者　岡本静夫氏
主演者　中村小福氏
久野あかね嬢

第一百六十九號

紹介

非人の娘と旗本との特殊な戀物語を眼目とする默阿彌の「夢結蝶鳥追」や實録本の「月鼈玉の興」などで知られて居るおこよ源三郎の物語を脚色したものでこれも歌舞伎映畫の範圍に入るべき作品である。内容は鳥追のおこよと旗本の座光寺藤三郎（本篇では態と前記以外の實説に依る名を用ひて居る）の戀物語を主として見せたものであり默阿彌ものに出る雪駄直しの長五郎や女賊熊吸お長、實録本に於る飯盛女おふぢお松などの挿話は全然省略されて居るが肝心のおこよの素性を或方面への遠慮から曖昧にしてある爲め階級制度から起る悲劇を狙つた原作の興味は可成り薄められて居る。脚色もその缺陷を補ふに足らずして平凡な戀物語に終らして居るが江後岳翠氏の監督が「女夜叉」程度の出來を推持して居るので平凡ながら左程惡感も抱かせなかつた。中村小福氏の藤三郎は持前の上品さが役立つて今度も優れて見えたがおこよが落ちるので釣り合ひが取れなかつた。久野あかね嬢のおこよは容姿の惡い嬢のやる役ではない。濃艶な情緒を織り出す筈のおこよの鳥追姿もあれでは法界屋位にしか受取れなかつた。長五郎の穴である片桐恒男氏の金太の役はこれも役の性根が不鮮明で變だがやる事は相變らずの器々しさである。岩井竹緑氏の多吉は意味のない役ながら五九郎式の演技でくすぐつて居る。技術方面は難のない出來であつた。

――山本　緑葉――

興行價値――歌舞伎劇を知つてゐる觀客なら引付けられる物語だが一般觀客には平凡な作品であらう。（七月廿八日　大阪芦邊劇場　神戸相生座　京都キネマ倶樂部封切）